

いま、漢代におけるエチナ・オアシスのことについて知るためには、『史記』・『漢書』といった典籍資料をみるほかに、居延漢簡という出土遺物を利用することができる。むしろ、居延漢簡を使わずには、この時代のエチナ・オアシスについて何も言うことができないのではないか、という感すらある。では、その耳慣れぬキョエンカンカンなるものは、一体何なのか、そこから何がわかるのか——このことについては、既に概説書がいくつか出版されており¹、このわたしが屋上屋を架すまでもないとも思われる。ただ、従来とは違った角度からこの漢簡をながめることはできないものか、とわたしはかねがね考えていたので、このたび、機会を与えて頂いたのを幸いに、この場をお借りして論じてみようと思う次第である。なじみの薄いものを扱うことになるが、おつきあい頂ければ幸いである。

I 居延漢簡略説

1) 居延漢簡とは何か

居延漢簡、というのは、くどく説明すると「居延で発掘された漢の時代の竹製ないしは木製のふだ」と言ったらよいだろうか。順序が逆になるが、まず「居延漢簡」の、「簡」の字義から説明しよう。周知のように、紙というものが存在する前、文字は竹製のふだに書かれていた。この割り箸状(箸箱のフタみたいなもの、と言う方もおられる)、およそ幅1cm～3cm、長さ23cmほど(この長さは漢代の一尺にあたる)のものを紐で結わえ、そこに文字を書き、最後にぐるぐると巻きこんでゆく。この細い一本一本の竹ふだを「簡」と称するのである。この形態だと、ある程度大量に簡をつなぐことができるので、長い文章を書くときに適している。一方、木製の幅の広い板状のものが使われるときもあり、こちらは「牘」と呼ばれている。これは一枚の牘で内容がすんでしまうときに使われるときが

*1 わたしがこの小文を書くにあたり、最も参考にさせていただいたのが初山 1999と初山 2001である。これは主に氏の見解に従ってまとめたものであることを、あらかじめお断り申し上げておく。

多い。この「簡」と「牘」の両者を併せて「簡牘」と呼び慣わしているのである。

「簡」の材質は竹製と説明したが、実際、居延など中国西北辺境から出土した簡は、ほとんど大多数が木でできた木簡である。なぜ竹簡がみつからないのか、といえば、それはこのあたりに竹がないからだ。この地域から出土した木簡は、ほとんどがこのあたりに自生する植物を使用したものである^{*2}。それゆえにいわゆる幅広の「牘」は、太い木がないために、この地域からはほとんどみつからない。また、文字を間違えた際、丁寧に削り取ったときに生ずる削り屑もみつまっている。木簡も貴重な材料であるために、このような措置がとられたと推測する説もある^{*3}。こうした辺境から出土した木簡は、のろし台やその上級機関からみつかっており、こうした両者の間でやりとりされた文書、ないしは帳簿のたぐいが主であるために、ほとんどが現地生産されたものと考えて差し支えない。

ということで、「漢簡」といえば漢の時代の簡牘、「晋簡」といえば晋の時代の簡牘資料を指すのだが、この居延漢簡の場合は、というと、少々呼称がややこしい。ひとくちに「漢」といっても、これは前漢(B.C.206 ~ A.D.8)から後漢(A.D.25 ~ 220)までをひとくくりにして指している。前漢と後漢の間には短命に終わった王莽による新という王朝(A.D.9 ~ 23)もあり、居延漢簡のなかには、年号や字体・特殊な呼称からこの新の時代に書かれたと断定できる簡も数多い^{*4}。ではこれを居延“新”簡と呼ぶべきではないか、と思われるが、実際は「王莽簡」と呼んでいる。この理由は、後述しよう。新が倒れた後も、河西回廊の政治動向は、中原の争乱状態を直接反映し、めまぐるしく変化する。居延“漢”簡には、王莽を打倒した劉玄(更始帝)政権の年号や、劉盆子を戴く政権の年号が書かれていると思えば、河北に地盤を据えた劉秀(光武帝)政権の年号が書かれている、といった具合だ。つまりこの場合、漢といっても、みつつの異なった政権すべてを指すことにもなる^{*5}。年号がどう書かれているかに着目しただけでも、この激動の時代が居延に及ぼした影響をたやすくみて取ることができるのである。

さて、居延で漢簡が最初に見つかったのは、1927年のことである。この年、Sven Hedinと徐炳昶^{じょへいちやう}とを団長とする中国・スウェーデン合同調査隊「西北科学考察団」が結成され、パオトウからウルムチにいたるまで、ゴビ砂漠を横断する探検が行われた。そのちょうど

*2 簡牘資料の材質については、夏鼐1948、甘肅省文物考古研究所1991を参照のこと。

*3 Stein 1921 参照。

*4 新の時代の簡の抽出方法については、李均明 1995 を参照のこと。

*5 この時代の河西地方の動向については、鶴飼 1996 を参照されたい。

中間地点にあたるエチナにて、中国側から参加した考古学者^{こうぶんひつ}黄文弼が発掘した3点の木簡が、居延漢簡のさきがけとなったのである^{*6}。

1930年、西北科学考察団は、大々的なエチナ川流域の調査に取りかかる。この調査にあたったのが Hedin の片腕とよばれた Folke Bergman である。Bergman はエチナ川沿岸に点在する漢代のろし台跡(28カ所)から、計 11,000 点という大量の木簡を掘り当てたのだ。これが「居延漢簡」とよばれるものである。この居延漢簡は、中国・スウェーデン間での取り決めにより、北京にて研究が行われるはずであったが、直後に勃発した日中戦争のせいで、数奇な運命をたどる。様々な紆余曲折と関係者の艱難辛苦を経て^{*7}、現在は台北の中央研究院歴史語言研究所に所蔵され、赤外線カメラを使った新たな釈文作成のためのプロジェクトが進行中とのことである^{*8}。

居延漢簡とは、これだけではない。1972～1976年に甘肅省文物考古研究所による発掘が行われた。発掘対象となったのは3カ所の遺跡である。Bergman の遺跡番号では A8、漢代には^{こうきょこうかん}甲渠候官とよばれたのろし台を統括する役所跡から出土したものが 7865 点、おなじく第四^{すい}燧というのろし台の遺跡 P1 からは 175 点、そしてエチナ川中流の^{けんすいきんかん}肩水金関という関所跡(A32)からは 11577 点の木簡がみつかった(A32 出土簡は、現在ほとんどが未発表である)。この 72～76 年発掘のものを「居延新簡」、Bergman 発掘のものを「居延旧簡」とよぶことになった。つまり、「新簡」といっても王莽の新王朝とは関係がないのである。

要するに、「居延漢簡」とは、「居延旧簡」と「居延新簡」との総称なのだが、この「居延漢簡」は、今後も増加することが既に見込まれている。たとえば、1986年には、A33(=肩水候官)で 1000 点余り^{*9}、2001 年からは内蒙古自治区文物考古研究所によって行われている発掘では、T14(=第七燧)、T13(=第九燧)、T10(=第十四燧)、第十六燧(おそらく T9)にて新たに 500 点ほどみつかった、との報告がなされている^{*10}。ところがいずれも未発表

*6 黄烈 1990, p.106 参照。このほかにも、こののち 1931 年に黄文弼は地元人から数本の簡を得ていたらしい(黄文弼 1948)。いずれにせよ彼はこのときの調査報告を西北科学考察団に提出していないので、詳細はまったく不明なのだが。

*7 このときの経緯は沈仲章 1993 に詳しい。

*8 この成果として、簡牘整理小組 1998 や簡牘整理小組 2000 がある。

*9 薛英群 1991, pp.94～95 参照。

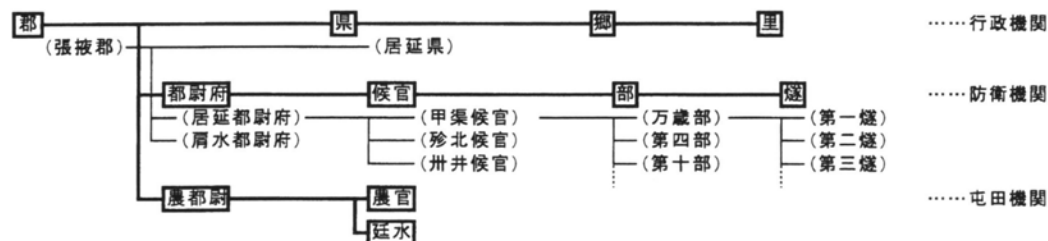
*10 中国考古学会 2001(pp.136～137)、2002a(pp.133～134)、2002b(pp.130～131)、2003(pp.160～161)参照。

なので、われわれが使うことのできる「居延漢簡」とは、いまのところ、1930 年出土のものと、1972～1976 年出土のものに限られているのである。

2) 居延漢簡とは何だったのか

居延漢簡には、何が書かれているのか、というところ、内容は文書と帳簿^{もんじょ}、そして若干の書籍に分類される。文書とは、佐藤信一氏の定義に従うと、「甲から乙という特定の者に対して、甲の意志を表明するために作成された意思表示手段」を指す^{*11}。この定義に従うと、文書とは移動するものを指すことになるが、文書の書式を備えているからといって、必ずしもその簡が実際に移動したものとは限らない。文書の控え(コピー)が保存されていたものの可能性が存在しているからだ。一方、帳簿は、武器などの物品リストや、兵卒へ支給する穀物の記録などである。この帳簿とは文書とは違って、移動しない。書籍とは、医学書や漢字の教科書の断片である。また、これのどれにも含まれないものに、袋にくくりつけるためのつけ札^{けつ}(楮)や封をするための板(検)がある。この楮や検には、宛先が書いてあるので、出土遺跡が漢代のどういった役所に該当するのかを決定づける重要な遺物である。

次に当時の居延の行政系統図をあげておこう。文書というものは、基本的には、直接の上



級機関と下級機関との間でやりとりされるものである。中央政府や郡から直接のろし台に文書が発送される、ということは、ない。中央から発令された文書は、郡や国の数だけコ

*11 佐藤 1971, p1 参照。佐藤氏はその新版(佐藤 1997)で、文書と帳簿は「機能的に密接に関係し」、「文書の体系の全体像は、従来のいわゆる文書と、(中略)照合帳簿その他との相互関連、相互規定の総体を明らかにしてはじめて把えることができる」と、文書そのものの定義に関して修正を加えている。この背景には、中国や平城宮のものを代表とする日本出土の木簡研究が大きく進み、その成果が大きく寄与したことがある。

ピーが作成され、地方に向けて一斉に発送される。郡では都尉府や県の数だけ文書が書き写され送られる。さらに今度は、都尉府にて候官の数だけ文書のコピーが作られ、各候官へと発送される。中央政府の意向が文書で地方末端ののろし台にまで行きわたるシステム——現在とさして変わらぬ文書行政たるものは、この漢代にすでに完成されていたのだ^{*12}。

現在公開されているもののうち、最大の量の漢簡が出土した A8 遺跡を例にとると、「都尉府」の下級機関、数カ所ののろし台（「燧」）を統括する「部」の上級機関である「候官」とよばれる官署が設置されていた。よって、この候官から出土した文書は、都尉府から下達されたもの、部や燧から上申されたものがほとんどである。中には候官から都尉府への文書があるのだが、発掘地点が候官の遺跡であることを考えると、それは都尉府へ送った文書の控えであることがわかるのだ。

では、その文書には何が書かれているのか。居延漢簡が発掘された遺跡は、先述したように、のろし台などの防衛機関に属するものである。図示したように、当時の居延地域は、行政機関と防衛機関が別系統にわかれており、居延漢簡はいまのところ、その防衛機関、それも最前線組織からしか出土していないのである。当然漢簡の内容も、こうした辺境防衛の最末端における日常（いいかえれば、ルーティーン）を、おのずと反映したものになるのである。

居延をふくむ河西回廊の辺境防衛組織が築かれたのは、武帝の時代、漢王朝がこの地域を直接統治した時である。『漢書』によれば、漢が烏鞘嶺をこえて河西郡を設置したのが元鼎二年（B.C.115）のことである^{*13}。その 13 年後の太初三年（B.C.102）、路博徳なるものに命じ、居延に遮虜鄣を築かせた、という記述がある。居延に県が置かれ、防衛線などが築かれたのは、それ以後のこととなろう。この防衛線は、おおよそ後漢の中期頃に廃棄されたのではないか、という説が有力である。しかし、居延には依然として定住者が住み続けていた（後漢最末年に、この一帯は西海郡として郡に昇格した、と言われている）。彼らにとっては、匈奴の勢力はすでに脅威ではなくなったことを意味するのだろう。

*12 このことについては、なんといっても、ばらばらの居延簡から、中央から送られた詔書を拾い集め復元した大庭 1961 に尽きる。

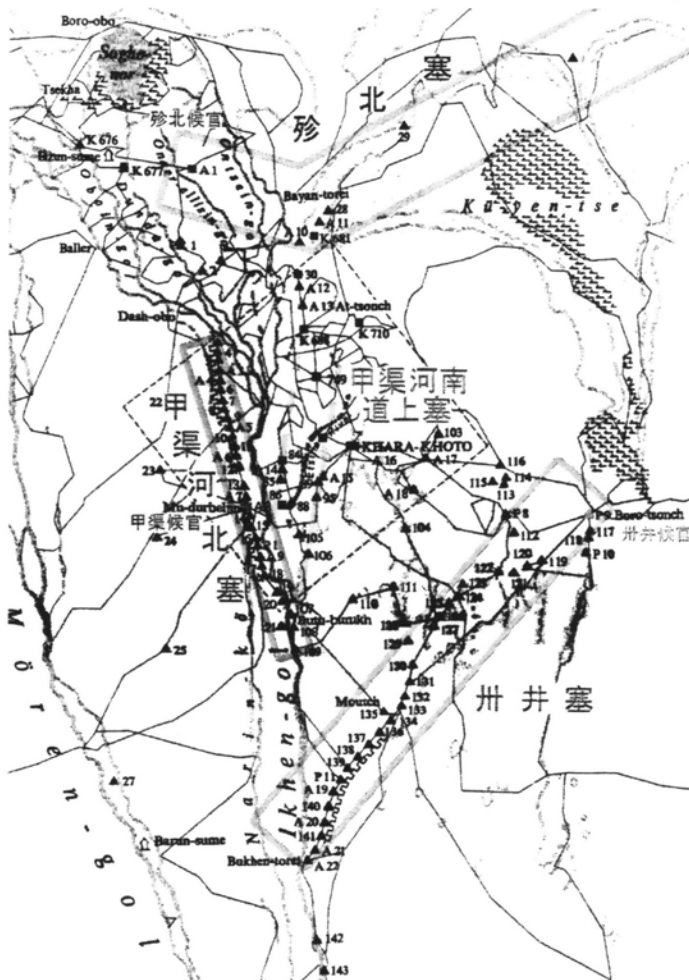
*13 武威・張掖・酒泉・敦煌のいわゆる河西四郡の成立については、諸説入りまじっている。ここでは、日比野 1954 の説に従った。

II 古代エチナ川とエチナ・オアシスの範囲

1) 漢代のエチナ・オアシスの範囲

近年の発掘調査によると、緑城地域より青銅器時代の墓がみつかった、との報道がなされている^{*14}。このエチナ・オアシス一帯に定住者が存在していたのは、この青銅器時代まで遡ることができるようだ。

Bergman 作成の地図によれば^{*15}、漢代のエチナ・オアシスは、三方を約 2km 間隔に設置された燧や長城といった防衛線によって囲まれていたことがみてとれる。一方、居延新簡のなかには、「蓬火品約」というのろしの挙げ方についての規定が含まれており、ここには4カ所の塞の名称(甲渠河北塞・甲渠河南道上塞、^{さんじつせい}卅井塞、^{てんぼく}殄北塞)がみえる。このうちの3カ所と、地図上の3本の防衛線が、それぞれ対応しているとみなされる。



① F109 から F3(A1(=殄北侯官か)まで達するかもしれない), すなわち Ikhen-gol に沿って南北に走るライン(甲渠河北塞にあたる)。なぜか, F109 から南, A22 にいたるまでは, 烽燧は見あたらない。

また、地図上の遺跡群からは、はっきりとわからないが、ここから K710・K688 にむかってラインが枝分かれしているようだ(甲渠河南道上塞)。居延経営の中心地であった居延都尉府・居延県に向かうルートと考えられているが、このあたりの遺跡の残存状態がよくないために、このあたりの防衛・通信ラインがどうなっていたのかは、いまひとつはっきりとしない。

*14 中国考古学会 2002a, p134 参照。

*15 Sommarström 1956 所掲のものを利用した。

② A22 から P9(=卅井候官), 居延沢の南端まで走る南西―北東に走るライン(卅井塞). A22 はエチナ・オアシスの南端にあたり, 懸索関^{けんさくかん}という関所がこの附近に設置されていた.

③ A1 から A11・A10 や F28 から F29 まで, 東西に居延沢の北端まで走るライン(殄北塞). 景愛氏によると, F29 以東の旧居延沢北方に漢代烽燧跡がある, というから^{*16}, このラインはさらに東に伸びると思われる. 旧居延沢北方は岩場が多いために馬が乗り入れることができなかつたらしく, 匈奴の騎馬が侵入することは, オアシス西側に比べて少なかったと思われる. 燧の間隔など防衛線の性質が, 他の地域とは異なっていたのかもしれない.

旧居延沢東側からは燧はみつかっていない. 居延沢が天然の要害となり, 匈奴の侵入を阻んでいたと思われる.

さて, この防衛線に守られた地域が, 漢代のエチナ・オアシスの範囲と考えられるのだが, では, 当時のエチナ・オアシスの中心地はどのあたりだったのだろうか. 実はこれが懸案事項なのだ. というのは, 軍事司令塔にあたる居延都尉府や, 民政機関の中心である居延県が, どの遺跡に比定されるのか, 説が分かれており, 未だに見解の一致をみないからである.

簡単に諸説を紹介しておこう. まず居延県の候補地は①:Khara-khoto(K799)に比定するもの. この説はつとに勞榦によってとなえられた. ②:K710 に比定するもの. ③:緑城に比定するもの, とおよそこの三説が出されている. 一方, 居延都尉府の候補地は, ①:K688 説, ②:K710 説, ③:A8 説が出されたが, 陳夢家によって主張された③説^{*17} は, 居延新簡の出現により既に否定されており, 実質的な候補地は2カ所に絞られている. 手がかりは, 次の2本の簡である.

官去府七十里(下略) (EPS4.T2:8 第四燧出土^{*18})

候官は都尉府を去ること七十里

𠄎官居延去候官九十里 (266.2 甲渠候官出土)

居延は候官を去ること九十里

*16 景愛 1994, 景愛 1999 参照.

*17 甲渠候官と都尉府が A8 に併置されている, というもの. 陳夢家 1963 参照.

*18 居延漢簡の釈文は, 旧簡は謝・李・朱 1987, 新簡は甘肅省文物考古研究所 1990 に拠る.

ここの候官とは、出土地が属していた甲渠候官(=A8)を指す。ここから七十里(=28.98km)、九十里(=37.26km)離れた遺跡を探せばよいことになる。机上の計算になってしまうが、最も当てはまりそうなのが、居延県が K710、居延都尉府が K688、ということになるのだ。ただし、物証が見つからない限り、最終決定には至らない。

この防衛戦に守られるかたちで、農業が行われていたと考えられるのだが、そもそも居延漢簡は軍事施設から出土したために、当時の農業について理解を得ることは、なかなか難しい。自衛隊の駐屯地から、むかしの農林水産省関連の書類をみつめてくるぐらいの難しさ、といえはよいだろうか。Khara-khoto から北、K688 のあたりまで幅 8m ほどの渠が巡らされている、との報告がされているし、また、F749 から F710 あたりにも、石臼などが転がっている、という。この一帯が農地であったことは間違いなかろう。また、南東の緑城あたりにも渠の跡がのこっているが、肝心の時代が漢か西夏か元か、特定することができない。

ただし、数少ない簡からいえることは、居延、もしくは南方の肩水の屯田は、昭帝・宣帝までで、それ以降はみられないことだ。これは屯田事業が縮小したことを意味しよう。屯田関係の官職も見られなくなる。これは、官主導の農業経営が軌道に乗ったために、順次民間の手にわたされた、と解釈できるだろう。居延の南、肩水管轄下の A35(=肩水都尉府)でみつかった次の簡は、動員された人数、耕された畝数、そして収穫高が記載されている、という点で、ことさら興味深いものである。

◎ 72.EJC-1^{*19}

第四長安親，正月乙卯初作尽八月戊戌，積二百〔廿〕四日，用積卒二萬七千百卅三人，率日百廿一人，奇卅九人。墾田卅一頃卅四畝百廿四步，率人田卅四畝，奇卅畝百廿四步。得穀二千九百一十三石一斗一升，率人得廿四石，奇九石。

第四長の安親，正月乙卯の日に初めて作業してから八月戊戌にいたるまで，合計二百二十四日間に，田卒をのべ二万七千百四十三人動員，一日あたり百二十一人だと余りが三十九人。農地を耕すこと合計四十一頃四十四畝百二十四步，一人あたり三十四畝を耕すと，余りが三十畝と百二十四步。収穫した穀物が二千九百一十三石一斗一升，一人あたり二十四石だと，余り九石。

*19 この簡は甘肅省文物考古研究所 1988, p.87 に釈文のみが掲載されたもの。写真は未公開である。

残念なことに、この簡が前漢か後漢のものかわからないために、現在の単位に換算することができない——新の時代に度量衡単位の大改変が行われたのだ——。この簡に関するさらなる情報が欲しいところなのだが。

2) 河道と烽燧線

当節では、漢代の河道について考えてみることにする。従来の研究では、居延漢簡にみえる「河」とは、漠然と Ikhen-gol を指すものと考えられてきた。地図を見れば明らかに、確かに、Ikhen-gol に沿って烽燧が並んでいるのを見ると、漢代にも Ikhen-gol が流れているところに「河」が存在していた可能性はあるだろう。しかし、その「河」とは、居延沢に注ぐ本流のエチナ川そのものであったのだろうか？

では、エチナ川が漢簡上にどのように登場するのか、実際に読んでみよう。次に引用する EPF22-169 ～ 172 は、四枚の簡からなる冊書である。

◎ EPF22-169 ～ 172

建武泰年六月庚午，領甲渠候職門下督盜賊，敢言之。新除第二十一
隊長常業，代休燧長薛隆，迺丁卯舖時到官，不持府符。●謹驗問隆，
辭：今月四日食時，受府符，詣候官，行到遮虜，河水盛，浴渡失亡符水中。案隆丙寅
受符，丁卯到官。敢言之。

建武七年(31年)六月庚午(8日)，領甲渠候職門下督盜賊の某が申し上げます。第二十一燧長の常業を新たに任命し、休暇中の燧長である薛隆に代えたのですが、さきの丁卯(5日)の舖時(昼すぎ)に甲渠候官にやってきましたが、都尉府の発行した通行証を所持しておりませんでした。●つつしんで隆を取り調べましたところ、次のように供述しました。「今月の4日(丙寅)の朝十時ごろに都尉府の通行証を受け取り、甲渠候官に向かい、遮虜燧にやってきましたが、河の水が多く、渡ったときに通行証を水中に無くしてしまいました」。案ずるに、隆は丙寅(4日)に通行証を受け取り、丁卯に甲渠候官にやってきました。以上申し上げます。

このいささか粗忽な薛隆は、遮虜燧(所在地不明)から河を渡って甲渠候官(=A8)にやってきました。つまり、都尉府から甲渠候官にやってくるときに、遮虜燧で「河」を渡るのである。他にも「□道居延庶虜倉其下有河(居延庶(=遮)虜倉、そのもとには河がある)」とい

う簡(EPT40-75A)もある。遮虜燧には、遮虜城や遮虜倉などといった施設が設けられていたことが他の簡からわかる。この遮虜燧が路博徳の築いた遮虜鄣である可能性は、かなり高い。

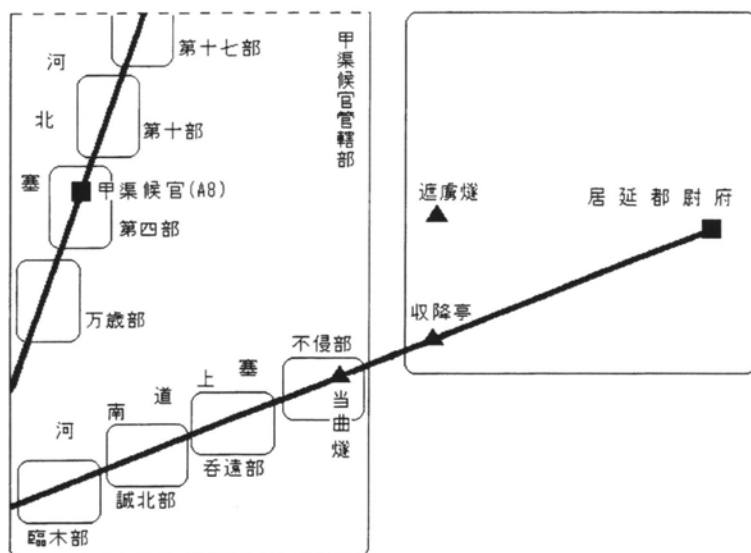
さらに、これ以外に「河」がどこを流れていたのかをみてみよう。

◎ EPT43-89

☑三月丙子、到当曲燧，河不通。燧長刑晏☑

……三月の丙子に、当曲燧までやってきたが、河が不通であった。燧長刑晏が……

この当曲燧という燧は、甲渠河南道上塞の最も東に位置する燧で、当曲燧のさらに東隣



に位置する居延收降亭は、もはや甲渠候官の管轄下にはないことが、郵書課とよばれる郵便配達の記録から判明している^{*20}。甲渠候官(A8)・居延都尉府(K688 もしくは K710)、そして先ほどの遮虜燧と当曲燧・居延收降亭の位置関係を図示してみると、下図のようになろう。

この当曲燧の近くには「河」

が流れていた。当曲燧のどこを「河」が流れていたのかははっきりわからないが、当曲燧と居延收降亭の間に行政区画の境界があるのならば、「河」もそこを流れている、と考えるのが自然ではなかろうか。つまり、甲渠候官管轄の境界線は、この「河」であった、ということである。この当曲燧と居延收降亭は、隣り合っているにもかかわらず、十九里も離れている、と李均明氏は指摘しているが^{*21}、これは両者の間に「河」が流れているからに他ならない。

*20 郵書課を用いて烽燧の位置関係を論じたものに、李均明 1989, 宋・李 1993, 宋・李 1994, 吉村 1998 がある。

*21 李均明 1989 参照。

もう少しまとまって残っている簡を読んでみて、前後の文脈からさらに位置関係を把握してみよう。

◎ EPF22-187A ～ 195 途中まで^{*22}

建武三年十二月，癸丑朔丁巳．甲渠鄯侯獲，叩頭死罪，敢言之．

府記曰，「守塞尉放記言，『今年正月中，從女子馮口借馬一匹，從今年駒．四月

九日，詣部，到居延収降亭，馬罷．止害燧長焦永行檄還，放騎永所用馱

馬去．永持放馬，之止害燧．其日夜人定時，永騎放馬行警檄，牢駒

燧內中，明十日，駒死．候長孟憲・燧長秦恭，皆知狀』．記到驗問明処言．

会月廿五日．」前言解．謹驗問放・憲・恭，辞皆曰「今年四月九日，憲令燧長焦永行

府卿蔡君起居檄，至庶虜，還到居延収降亭，天雨．永止須臾去，尉放使

士吏馮匡呼永曰，『馬罷，持永所騎馱馬來．』永即還与放馬，持

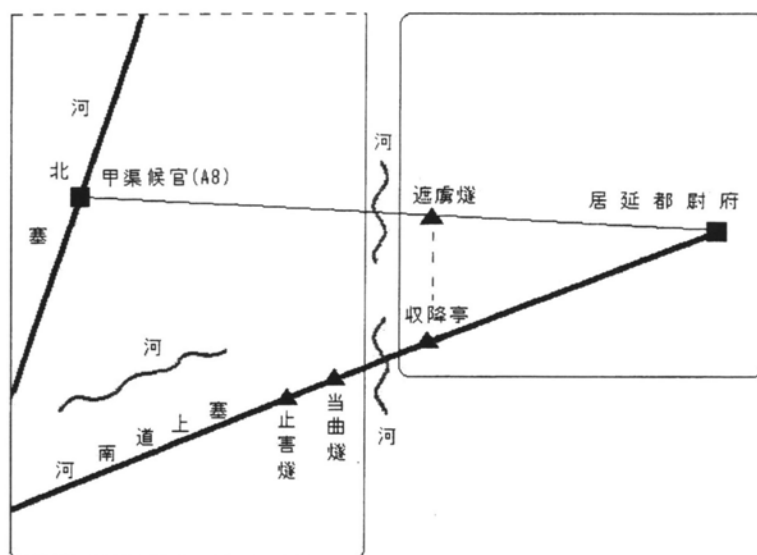
放馬及駒，随放後帰止害燧．……以下続く……

建武三年(27年)十二月癸丑朔丁巳(5日)，甲渠鄯侯(＝甲渠候官の長)の獲が申し上げます．都尉府からの文書には「塞尉(候官の尉)心得の放の文書に『今年の正月中に，女子馮口より馬一匹，今年生まれた子馬とともに借りました．四月九日，部署に行くとき，居延収降亭に到ったところ，馬が疲労してしまいました．止害燧長の焦永が警檄を伝送しており，放は永が乗っていた馱馬に乗って去りました．永は放の馬をつれて，止害燧に行きました．その夜の九時頃，永は放の馬に乗って警檄を伝送しに行くので，子馬を燧の中に囲っておきましたが，翌十日，子馬は死んでしまいました．候長の孟憲・燧長の秦恭は，みな事情を知っております」とある．この(都尉府からの)文書が到着したら，取り調べた上で明らかに判断を示し，報告せよ．締め切りは今月の二十五日．」(この点に関しては，)先に説明致しました．謹んで放・孟憲・秦恭を取り調べましたところ，みな次のように供述しました．「今年四月九日，孟憲は燧長の焦永に，府卿蔡君起居の檄を伝送させ，(永は)庶(＝遮)虜燧にいたり，戻ってきて居延収降亭に着いたところ，雨が降ってきました．永はしばらく止まって出発すると，塞尉の放が史吏の馮匡に命じ，永を呼び寄せて『馬が疲れてしまった．永が乗っている馱馬をつれてこい』と言わせました．永はすぐ

*22 この「駒疲労病死」冊書の解釈については，初山 1995 を大いに参照させていた
だいた．

に引き返し、放の馬と子馬をつれて、放の後について止害燧に帰りました。……」

話はかなりややこしいのだが、塞尉の放——塞尉は鄯侯の次官、つまり甲渠侯官管轄下ではナンバー2にあたる——に駅馬を取られてしまった止害燧長焦永の足取りを追ってこう。まず、焦永は止害燧を出発し、遮虜燧に向かった。そこから帰ってきて居延收降亭に着いたとき——雨のため、「河」が一時的に増水して渡れなかったのかもしれない——に、塞尉の放につかまってしまったのだから、この3カ所の位置関係は、止害燧→居延收降亭⇔遮虜燧となることがわかる。さらに、当曲燧・居延收降亭は、甲渠侯官よりもかなり東に存在していたことが、郵書課の分析結果からわかっている。これに、この三者と居延漢簡からわかる「河」との関係を図示してみると、次のようになろう。



図示してみると、この「河」とは、甲渠侯官のすぐ東を流れている現在の Ikhen-gol を指すのではないことがわかる。もしも「河」が Ikhen-gol を指すのであれば、薛隆が通行証を流した現場の遮虜燧は、甲渠侯官のすぐそばになってしまうからだ。そうなってしまうと、焦永の足取りが不自然なことになってしまう。むしろ、

Bergman 作成の地図にみえる“Etsina River”，Colona 衛星写真からみてとれる古河道が、それにふさわしいと思われる。

ただし「河」の存在が、これだけである保証はない。ここで検討したものは、偶然に残り、みつかった漢簡から導き出されたものである。実際に、何回渡河する場所があったのかはわからないし、かなり存在したであろう支流も「河」と称されていた可能性もある。だから、この漢簡から判明した「河」の位置と、地図や写真の古河道とをすぐに一致させることができる、とはいかないのである。たとえば居延簡にみえる「河」がこの旧河道を指すのであれば、「甲渠河南道上塞」の「河」も旧河道を指す可能性が高いのだが、烽燧遺跡は旧河道の北側に多く、南側には少ないことが気にかかる。もちろん、みつかった遺跡も偶然に残ったものだから、水位の変化や風によって沙中に埋もれてしまった可能性もあろう。景愛氏が旧居延沢北方で発見した烽燧跡のように、未発見のものが存在する可能

性も考慮に入れておかねばならない。とまれ、現在進行中という内蒙古考古研の調査結果（と、数多き未発表簡牘の公開）に期待しつつ、それが公表されるまでの間、現在手にするものからどれほど多様な情報を引き出すことができるのかを、引き続き考えていくことが、これからのわたしの課題である。

参考文献

【日文】

- 鵜飼昌男 1996 「建武初期の河西地域の政治動向——『後漢書』竇融伝補遺——」（『古代文化』第48巻第12号）
- 大庭 脩 1961 「居延出土の詔書冊」（『関西大学東西学術研究所論叢』第52号 のち大庭 1982『秦漢法制史研究』（創文社，東京）所収。）
- 佐藤進一 1971 『古文書学入門』（法政大学出版局，東京）
- 佐藤進一 1997 『新版古文書学入門』（法政大学出版局，東京）
- 沈 仲章 1993 「搶救『居延漢簡』歴險記」（門田明訳）（大庭脩編『漢簡研究の現状と展望 漢簡研究国際シンポジウム'92 報告書』（関西大学出版部，吹田）所収）
- 日比野丈夫 1954 「河西四郡の成立について」（『東方学報』京都第25冊 のち日比野 1977『中国歴史地理研究』（同朋舎，京都）所収）
- 舩山 明 1995 「居延新簡「駒疲労病死」冊書——漢代訴訟論のために・続——」（『堀敏一先生古稀記念 中国古代の国家と民衆』（汲古書院）所収
- 舩山 明 1999 『漢帝国と辺境社会——長城の風景——』（中公新書 1473 中央公論新社，東京）
- 舩山 明 2001 「漢代エチナ=オアシスにおける開発と防衛線の展開」（富谷至編『流沙出土の文字資料——楼蘭・尼雅(ニヤ)文書を中心に——』（京都大学学術出版会，京都）所収）
- 吉村昌之 1998 「居延甲渠塞における部隧の配置について」（『古代文化』第50巻第7

号)

【中文】

- 夏 竦 1948 「新獲之敦煌漢簡」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第19本 のち
夏竦 1961『考古學論文集』(考古學專刊甲種 科學出版社)所收)
- 甘肅省文物考古研究所 1988 『居延新簡積粹』(蘭州大學出版社, 蘭州)
- 甘肅省文物考古研究所 1990 『居延新簡 甲渠候官與第四燧』(秦漢魏晉出土文獻
文物出版社, 北京)
- 甘肅省文物考古研究所 1991 「敦煌馬圈灣漢代烽燧遺址發掘報告」(甘肅省文物考
古研究所 1991『敦煌漢簡』(中華書局, 北京)所收)
- 簡牘整理小組 1998 『居延漢簡補編』(中央研究院歷史語言研究所專刊 中央研究
院歷史語言研究所, 台北)
- 簡牘整理小組 2000 「中央研究院歷史語言研究所藏 居延漢簡整理近況簡報」(『古
今論衡』第4号)
- 景 愛 1994 「額濟納河下游環境變遷的考察」(『中國歷史地理論叢』1994年第1期)
- 景 愛 1999 『沙漠考古通論』(中國考古文物通論叢書 紫禁城出版社, 北京)
- 黃 文弼 1948 『羅布淖爾考古記』(中國西北科學考察團叢刊 國立北平研究院史學研
究所, 北京)
- 黃 烈 1990 『黃文弼蒙新考察日記——(1927—1930)』(文物出版社, 北京)
- 謝桂華・李均明・朱國照 1987 『居延漢簡積文合校』(秦漢魏晉出土文獻 文物出版
社, 北京)
- 薛 英群 1991 『居延漢簡通論』(蘭州教育出版社, 蘭州)
- 宋會群・李振宏 1993 「漢代居延地區郵驛方位考」(『河南大學學報(社會科學版)』
第33卷第1期)
- 宋會群・李振宏 1994 「漢代居延甲渠候官部燧考」(『史學月刊』1994年第3期)
- 中國考古學會 2001, 2002a, 2002b, 2003 『中國考古學年鑑』1999, 2000, 2001, 2002
(文物出版社, 北京)
- 陳 夢家 1963 「漢簡考述」(『考古學報』1963年第1期 のち陳夢家 1980『漢簡綴述』
(考古學專刊甲種 中華書局, 北京)所收)
- 李 均明 1989 「漢簡所見「行書」文書述略」(甘肅省文物考古研究所編『秦漢簡牘論
文集』所收 のち李均明 1999『初學錄』(蘭臺文史叢書 蘭臺出版社,
台北)に所收)

李 均明 1995 『新莽簡輯証』(補資治通鑑史料長編稿系列 新文豐出版, 台北)

【英文】

Stein,A 1921 Serindia : detailed report of explorations in Central Asia and westernmost China
(Oxford, Clarendon)

Sommarström,B 1956 Archaeological researches in the Edsen-gol region Inner Mongolia vol.1
(Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China
under the leadership of Dr. Sven Hedin : the Sino-Swedish Expedition Statens
etnografiska museum, Stockholm)